

エドモンド・スペンサー『羊飼いの暦』 (*The Shepheardes Calender*) と *The Kalender of Shepherdes* 文学ジャンルとしての「暦」

円浄 ゆり

1. 『羊飼いの暦』のジャンルの複合性

エドモンド・スペンサー (Edmund Spenser) の初期代表作『羊飼いの暦』 (*The Shepheardes Calender*) は、古典詩人テオクリトスやウェルギリウスの『牧歌』にならった作品であり、英語で書かれた最初の牧歌詩作品の一つに数えられる。しかしながら、『羊飼いの暦』は牧歌詩だけでは収まりきらない要素を備えている。S. K. Heninger, Jr.によると、『羊飼いの暦』には複数の文学ジャンルが混在しており、古典牧歌、暦、動物寓話、ロマンス詩、諷刺詩、ペトラルカ風詩の要素を見出すことができる (645)。本発表ではこの文学ジャンルのうち、英語では‘calendar’もしくは‘almanac’と称される「暦」に着目し、*The Kalender of Shepherdes* との比較を通して、スペンサーの『羊飼いの暦』における「暦」らしさとは何かを追求した。

『羊飼いの暦』と *The Kalender of Shepherdes* の直接的な関連性は、『羊飼いの暦』に収録された Gabriel Harvey への献呈書簡に見出せる。E. K.によると、スペンサーは若者によく見られる「愛の迷宮」を長年さまよっていたが、「自らの情熱の熱を和らげ、鎮めるため、そして自分と同等の立場にある若き羊飼いたちに対して不幸な愚行を戒めるため、これら 12 篇の牧歌を編んだ」のである (Spenser 10)。そして、これらの詩が 12 か月の状態に対応するよう構成されていることから、この作品を『羊飼いの暦』と名づけ、「古い名称を新しい作品に当てはめた’ (‘applying an olde name to his new worke’) と語る (10)。すなわち、この一節で E. K. は『羊飼いの暦』のタイトルの由来について述べており、ただ 12 の牧歌詩が 12 か月の月に対応しているだけではなく、自らの愚行を若き羊飼いに、すなわち若き読者に戒めるため、既存のタイトルを採用したと述べている。厳密には *The Kalender of Shepherdes* とは言及されていないが、古い名称を採用したと述べるだけで *The Kalender of Shepherdes* であることが想起されるほど、認知されていたタイトルであったと考えられる。

2. ジャンルとしての「暦」と *The Kalender of Shepherdes*

Phebe Jensen が指摘しているように、初期近代イングランドにおける「暦」は、私たちが一般的にカレンダーと聞いて想像するものではなく、中世以来、時の算定に関する論考、医療の手引き、そして暦やその他の事柄を題材とした素朴な詩などを含む「アンソロジー」として受容されていた (2)。すなわち、16 世紀イングランドにおいて、暦は天文学や歴史、宗教、医学といった日常で役立つ情報が付随したものを指し、さらには占星術予報などが付属し、毎年印刷されるものであった。

The Kalender of Shepherdes は、1493 年から 1500 年の間に、パリ及びジュネーヴで少なくとも 8 回印刷された人気の「暦」であった。最初の英語訳は 1503 年に出版されたもので、スコットランド方言の強い粗悪な翻訳とされている (Driver 200)。その後 1506 年に Richard Pynson がより正確な翻訳を出版し、続く 1508 年には Wynkyn de Worde が別の翻訳を出版している。この版以降も印刷され続け、版によって内容は異なるものの、1631 年までに 19 回の再版を重ねている。Martha W. Driver によると、*The Kalender of Shepherdes* は羊飼いたちの知恵を集めた‘miscellany’として、移動祝祭日の日付を算出するための表、煉獄の責め苦の描写、十戒・主の祈り・使徒信条の解説、さらには医療知識やその他の実用的情報が収められ、貴族階級から中産階級の読者に至るまで、イングランドで幅広く読まれていた (200-1)。端的に言えば、一家に一冊あれば役立つ実用書として機能していたのである。

本発表で利用した版は British Library に所蔵されている 1506 年版の Richard Pynson による翻訳であり (STC 2nd ed. 22408)、1497 年ジュネーヴ版を下敷きにした 1503 年パリ版の英訳であり、パリ版とほぼ同じ内容である。その内容は Sommer によって 5 部に分類されている：第 1 部は 12 か月の暦の記述、第 2 部はキリスト教にける罪の分類についての図像と論考、第 3 部はキリスト教道徳について、第 4 部は人体にまつわる治療法や迷信、第 5 部は天文学および占星術に関する論考となっている。本発表では第 2 部に記述された「罪の樹」の図像と七つの大罪を犯した人々が向かう地獄の描写を中心に紹介し、平信徒に理解しやすいよう、厭世的な道徳観が多く挿絵と平坦な英語表現で語られている点を確認した。

3. 牧歌詩を「暦」として提示することの意義

スペンサーは古典古代の国民詩人たちを模倣する形で『羊飼いの暦』を出版し、後に叙事詩の要素をもつ『妖

精の女王』 (*The Faerie Queene*) を出版した。スペンサーにとって、牧歌を出版することは (国民) 詩人としてキャリアを形成するための第一歩であった。牧歌詩の出版にあたり、スペンサーは当時何度も再版されていた *The Kalender of Shepherdes* の人気を利用するため、読者に馴染みのあるこのタイトルを採用したのではないか。

スペンサーが、「暦」を意識していたことがわかる一節が、『羊飼いの暦』の ‘The generall argument of the whole booke.’ に記されている。ここでは『羊飼いの暦』がなぜ 3 月ではなく、1 月から始まるのかについて説明している。3 月始まりの「暦」を支持する古代の知識人たちに敬意を表しつつも、今までイングランド国民が継承してきた通りに 1 月から牧歌を始めると述べられており、なぜイングランドの「暦」が 1 月から始まるのかといえば、それは「全能の救い主にして永遠の贖い主、主キリストの受肉のゆえ」であると語られる (Spenser 13)。牧歌詩を「暦」の枠組みで出版するにあたり、特に意識されている点がキリストの降誕と世界の新生であり、この「荒廃した世界をキリストが新たに作る」 (‘for the incarnation of our mighty Sauour and eternall redeemer the L. Christ, who as then renewing the state of the decayed world’) という主張に *The Kalender of Shepherdes* と通ずる厭世観が見出せる。

『羊飼いの暦』の初期読者であった Sir Philip Sidney は *An Apology for Poetry* の中で、「『羊飼いの暦』は多くの詩的価値を有しており、もし私の判断が誤っていなければ、読むに値する作品である」と評価する一方、「その文体を古風で田舎風の表現に作り変えている点には賛同しかねる (‘That same framing of his stile to an old rustic language I dare not allowe’) 」と批判しており、その理由はギリシア語におけるテオクリトスも、ラテン語におけるウェルギリウスも、イタリア語におけるサナザーロも、そのような作風を志向しなかったからであると断じている (Smith 196)。シドニーはスペンサーの牧歌詩の詩的価値を評価しつつも、スペンサーが使用する「古くて田舎くさい言葉遣い」は古典詩人たちに見られない特徴であると指摘しているのだ。この ‘rustic’ という表現には、*The Kalender of Shepherdes* が有している、平信徒にもわかりやすい表現という含みがある表現とも解釈できる。

また、William Webbe は *Of English Poetry* の中で、『羊飼いの暦』の著者であるスペンサーはあらゆる点において古典詩人たちに比肩し得る人物であると評価し、この作品が書かれたのは「若者たちへの警告であり、恋愛や若さゆえの虚栄に絡め取られている者たちが、早いうちに自らを省みることを学び、時機を逸して防がなければ生じかねない不都合を避けることができるようにするためであり、多くの優れた道徳的教訓が含まれている」と論じている (Smith 263-4)。Webbe が『羊飼いの暦』を評価する点はその道徳的教訓にあり、まさに *The Kalender of Shepherdes* で中心的に扱われている主題である。

4. まとめ

スペンサーの『羊飼いの暦』は、「暦」という文学ジャンルの枠組みで、英語による牧歌詩を提示している。E. K. の献呈書簡で *The Kalender of Shepherdes* は直接言及されていないが、「古い名称を新しい作品に当てはめた」との言及で *The Kalender of Shepherdes* が想起されるほどには認知度が高かったと考えられる。加えて、『羊飼いの暦』の各牧歌詩末尾に示される登場人物の emblem (motto) は教訓的であり、キリスト教的・厭世的価値観が見出せる点に *The Kalender of Shepherdes* との類似点が見出せる。Sir Philip Sidney や William Webbe をはじめ、一部初期近代読者たちは『羊飼いの暦』における「古びた田舎くさい」表現と若者へのキリスト教的訓戒について反応しており、こうした『羊飼いの暦』に内包する要素は *The Kalender of Shepherdes* 由来の性質であると解釈できる。スペンサーはイングランド国民に馴染み深かった「暦」を利用して自身の牧歌詩を出版し、イングランドの国民詩人になるための布石を打とうとしたのではないか。

参考文献

- ‘Almanac, N., Sense 1.’ *Oxford English Dictionary*, Oxford UP, December 2025, <https://doi.org/10.1093/OED/6957086204>.
- Driver, Martha W. ‘When Is a Miscellany Not Miscellaneous?: Making Sense of the *Kalender of Shepherds*.’ *SThe Yearbook of English Studies* 33 (2003): 199-214.
- Heninger, S. K., Jr. ‘*The Shepherdes Calender*.’ *The Spenser Encyclopedia*, edited by A. C. Hamilton et al., U of Toronto P, 1990, pp. 645-51.
- Jensen, Phebe. *Astrology, Almanacs, and the Early Modern English Calendar*. Routledge, 2021.
- Smith, G. Regory, ed. *Elizabethan Critical Essays*. Vol. 1, Oxford UP, 1904.
- Sommer, H. Oskar. *The Kalender of Shepherdes: The Edition of Paris 1503 in Photographic Facsimile: A Faithful Reprint of R. Pynson’s Edition of London 1506*. Kegan Paul, 1892.
- Spenser, Edmund. *The Works of Edmund Spenser: A Variorum Edition*. Edited by C. G. Osgood and H. G. Lotspeich, Johns Hopkins P, 1943.